



Title	ウイルトタ語北方言における動詞接辞-lu-について
Author(s)	山田, 祥子
Citation	北方言語研究, 14, 331-350
Issue Date	2024-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92077
Type	bulletin (article)
File Information	18_Yamada.pdf



[Instructions for use](#)

[資料・研究ノート]

ウイльта語北方言における動詞接辞-*lu*-について

山田 祥子
(室蘭工業大学)

キーワード：ウイльта語、ツングース諸語、動詞、接尾辞

0. はじめに

本稿では、ウイльта語¹の動詞接辞の一種である-*lu*-²に着目する。この接辞はウイльта語の二つの方言、すなわち北方言と南方言のどちらにも共通してみられるが、そのふるまいには方言差や時代差がある。本稿は、特に北方言における動詞接辞-*lu*-の用例を提示し、そのふるまいを観察することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第1節で動詞接辞-*lu*-の位置づけ、先行記述、南方言の用例を確認する。第2節では、1990年代以降に採録された資料から、北方言における-*lu*-の用例を紹介する。第3節では、考察に代えて、前節までの内容をまとめ若干の補足を加える。第4節で結論を述べ、今後の課題を整理する。全体として、ウイльта語の動詞接辞-*lu*-は基本的に起動相 (inchoative) の意味を加える形式と考えられているが、1990年代以降の北方言に起動相だけでは説明しがたい事例もあるということを報告する。

1. 問題の背景

1.1 ウイльта語動詞論における-*lu*-の位置づけ

はじめに、ウイльта語の動詞論についての基本事項を確認する。

ウイльта語の動詞複合体の基本的な構成は、池上二良 (敬称略; 以下、本文・脚注で記すすべての人名において同様) による南方言の研究の蓄積 (Ikegami 1959 [2001a]; 1973 [2001a], 池上 1994b [2001a]; 2001b) を基礎に、Tsumagari (2009)、山田 (2013: 63-66; 2017a)、Tsumagari & Yamada (2023: 441-443, 448-451) の考察を加えて、表1のように一般化できる。この構成のなかで本稿の主題に掲げる-*lu*-は、「動詞語幹形成接尾辞」に位置づけられる。「動詞語幹形成接尾辞」は動詞の「基本の語幹」に後続して「二次的な語幹」をかたちづくる。Ikegami (1973 [2001a]) が記述の途中から verb-stem-formative suffix を verb suffix と略したことに倣って、本稿でも「動詞語幹形成接尾辞」を「動詞接辞」と呼んでいる。

¹ ウイльта語 (オロッコ語) はサハリン (樺太) 島の先住民族ウイльтаの固有の言語である。言語系統としてはツングース諸語の一つで、Ikegami (1974 [2001a: 395-396]) の分類によると、ナーナイ語 (ゴルディ語) やウルチャ語 (オルチャ語) とともに第 III 群に属する。ウイльта語の方言は、ポロナイスク [旧日本領樺太の敷香] を中心とする南方言とワールを中心とする北方言の二つに分けられる (池上 1994a [2001a: 249]; [] は筆者による補足)。2023年現在の民族人口は300人前後、そのうちの話者数は両方言を合わせて10名未満とみられる。本稿では池上 (1997: xi-xvi) にもとづき、ローマ字式音韻表記 (母音 /a, ə, o [ɔ], ɐ [o, ɐ], u, i, e/, 子音 /p, b, t, d, č[ʧ], ʃ[ʤ], k, g[ɣ, ɣ̃-ʝ], m, n, ŋ, l, r, s, x, w, j/) ([] で補足した発音記号のうち ɔ を ə に改変) によってウイльта語を表記する。

² 同音異義の文法形式として、名詞に付いて「~持ちの」という意味を加える接尾辞-*lu* があるが、共時的には動詞に付く接尾辞-*lu*-との関連が認められないため、本稿の考察対象としない。

表1 ウイルタ語における動詞複合体の構成（肯定文の述語の場合）³



「二次的な語幹」には複数の接辞が含まれることもある (Ikegami 1973 [2001a: 73])。このことにより、後述の(3)のように1語内に動詞接辞が複数立つ事例が形態論上は許容される。

Tsumagari & Yamada (2023: 441-443)では、Ozolinja (2013)を参考にウイルタ語の語構成を概観するなかで、出動派生動詞 (deverbal verbs) をつくる派生接尾辞の一種として *-lu-* を紹介した。動詞接辞 *-lu-* は品詞の転換こそ行わないが、動詞から動詞を派生させるという見方である。

1.2 動詞接辞 *-lu-* と活用語尾

表1で示したように、動詞接辞 *-lu-* の後ろには活用語尾が付く。ウイルタ語の動詞活用形は形動詞⁴・定動詞・副動詞に分類される。

動詞活用形のうち、述語形式に用いられるのは形動詞と定動詞である。定動詞の過去形と現在形は話者の直接体験を含意する (Tsumagari & Yamada 2023: 449)。筆者の考察では、定動詞の未来形 (近未来と遠未来の2種) も使用される文脈が限られるようである。その意味で、述語形式としては形動詞のほうがデフォルトといえる。以下、述語形式のなかでも形動詞を中心に扱う。

形動詞には人称と非人称の2種があるが、本稿では前者のみを扱うこととする。形動詞 (人称) には、完了 *-xA(n)/-či(n)*⁵、不完了 *-ri/-si*、未来 *-li* がある。ただし、*-či(n)* と *-si* は子音

³ 表1の用語について、以下で説明を補足する。「動詞語幹形成接尾辞」という用語はIkegami (1973 [2001a])、池上 (2001b) による。Ikegami (1973 [2001a])、池上 (2001b) ほか同著者によるウイルタ語の文法記述では suffix 「接尾辞」と ending 「語尾」を区別しており、「二次的な語幹」の外にある付属形式 (同一語内にあるもの) は「語尾」と呼ばれる。ただし、池上 (1994b [2001a]) のいう「感嘆・疑問・その他の語尾」は、動詞だけでなく他の品詞にも付く点、母音調和や融合といった音韻変化を除いては交替しない点などで、活用語尾や人称語尾などと明確に異なるので、Tsumagari (2009)以降は clitic 「倚辞」という用語で区別するようにしている。そのほか、品詞を問わず述語の末尾に付くが、前の要素に母音調和しない (音韻上は自立的な) 「語」と見なされる形式を池上 (1997 [2001a: 95]) は「付属語 (小詞)」と呼んだ。一般論としては clitic 「倚辞」を particle 「付属語」の下位分類とする見方もあるが、山田 (2017a: 62) でも考察したように、ウイルタ語では両者を呼び分ける必要があるので、便宜的に表1でも「= (倚辞) # (付属語)」としている。

⁴ Ikegami (1959 [2001a])、池上 (1994a [2001a], 2001b) が verbal-noun 「動名詞」と呼ぶものに当たる。Tsumagari (2009)や Tsumagari & Yamada (2023)では participle と呼ばれる。本稿では日本語を「形動詞」とし、グロスでは PTCP (=participle) としておく。形動詞は統語的に多機能で、名詞の修飾句となる機能、名詞句となる機能、述語となって文を終止させる機能を持つ。

⁵ 以下、A で母音調和によって交替する母音を代表する。完了・形動詞語尾の末尾の *n* は、述語形式に限って言えば、一人称単数語尾 *-bi* が後続する場合に鼻音化して *m* で現れる。(名詞句として与格 *-du* を後続する場合には *n* で現れる。) その他の多くの場合、末尾の *n* は実現しない。このように特定の条件下でしか現れないことを含意して、末尾の *n* を括弧に入れて表わす。

終わりの語幹や語彙的に決まった動詞の語幹に後続する形式であり、問題の接辞-*lu-*が付く動詞語幹には後続しないので、以下ではこれらの表記を省略する。

形動詞の述語用法では、多くの場合、完了-*xA(n)*が過去時制を、不完了-*ri*が現在時制を担う⁶。そのため、それぞれに「過去」「現在」というグロスを充てる考え方もあるが、本稿では Ikegami (1959 [2001a: 27-28])、池上 (1994a [2001a: 251-252]、2001b) に倣って、「未来」と並べるとアンバランスであることを認識しつつも) 形動詞の活用語尾-*xA(n)*と-*ri*には完了・不完了のグロスを充てることにする。

未来・形動詞語尾-*li*は南方言にはない、北方言の特徴の一つとみられる。このことについては山田 (2010; 2013: 103-105; 2023) が論じ、Tsumagari & Yamada (2023: 449)でも言及した。Tsumagari & Yamada (ibid.)ではさらに未来・形動詞語尾が本稿の主題である動詞接辞-*lu-*と不完了・形動詞語尾-*ri*の融合形から発展したと述べた。この記述をめぐる諸問題を山田 (2023) が挙げ連ね、取り組むべき課題が多いことを報告した。本稿ではそこから一步下がって、通時的な見解をいったん脇に置き、動詞接辞-*lu-*の共時態の観察に専念することとする。

さて、ウイльта語では全般に(動詞に限らず名詞でも)、一定の音韻的な原則⁷にしたがって形態素どうしが融合し、形態素境界が不明確になることがある。ここで動詞接辞-*lu-*の形態上の前後関係に着目してみると、原則として-*lu-*が直前の形態素と融合することはない(詳しくは、後掲(5)で引用する Ikegami (1973 [2001a])による記述を参照)が、後続する活用語尾と融合することは多々ある。頻出する例として、動詞接辞-*lu-*に不完了・形動詞語尾-*ri*が後続する場合は *-*luri* という音形ではなく、必ず融合形をとる。その融合形は、1930~40年代に話された北方言では Petrova (1963)により-*ilee* という形式が報告されている一方、Ikegami (1959 [2001a])ほか南方言の音韻形態論では-*lli*とされる。なお、後続するのが完了・形動詞語尾-*xA(n)*の場合や未来・形動詞語尾-*li*の場合は融合を起こさず-*luxA(n)*、-*luli*で実現する。

1.3 先行研究における-*lu-*の記述

1.3.1 Petrova (1967)、Ozolinja (2013)による北方言の記述

以下 1.3 節では、先行研究における動詞接辞-*lu-*の記述を方言ごとに確認する。まず北方言について、Petrova (1967)と Ozolinja (2013)を確認したい。

Petrova (1967)は、1930年代~40年代に旧ソ連のレニングラード(今日のサンクト・ペテルブルグ)に留学していたウイльта語話者を対象に行った調査にもとづく文法書である。同書は方言を区別していないが、対象は池上 (1994a [2001a])により北方言とされる⁸。

⁶ Tsumagari (2009: 9)のように最初から-*xA(n)*を「過去」、-*ri*を「現在」と呼ぶ概略的な記述もあるが、正確には「述語の役割では、[不完了や完了の]形動詞がそれぞれ現在 (PRS) や過去 (PST) のテンス・マーカ―として機能する」(Tsumagari & Yamada 2023: 448; []内は文脈にもとづく補足)と説明される。Tsumagari & Yamada (2023)では上記のように説明したうえで形動詞の述語用法にテンスのグロスを振った。だが、もっと厳密に言えば、述語用法でもテンスで説明しがたい用例もある。このことは山田 (2013: 100-103)で考察した。加えて、将来的に述語以外の用法(名詞句や名詞修飾句)まで視野を広げることを見通すと、形動詞の-*xA(n)*と-*ri*にはテンスでなく、できる限り完了・不完了のグロスで一貫させるほうが良いと考える。

⁷ 融合を起こす原則については山田 (2013: 66、2017a: 62-66)で詳述した。

⁸ 本稿の方言分類の基礎とする池上 (1994a [2001a])は地方で方言を分けることから論を進めている。直接的に述べられてはいないが、池上 (1994a [2001a])は Petrova (1967)の調査対象者がサハリン北部のワール

Petrova (1967)による動詞接辞 $-lu-$ の定義⁹を(1)、その例文を(2)(3)として引用する。以下、例文すべてにおいて、ウイльта語の音韻表記は本稿の方針に合わせて池上 (1997) のローマ字式表記に統一し、適宜、基底形とグロスを加える。特に明記のない限り、音韻表記の改変や基底形・グロスの分析は筆者による。ロシア語文献の場合、原典のロシア語訳に則して筆者が作成した日本語訳を付ける。動詞接辞 $-lu-$ が含まれる述語部分には、下線を付けて強調する。動詞接辞 $-lu-$ に対応するグロスの位置には基底形のまま $-lu-$ を充てる。

(1) $-lu-$, $-l$ は、ツングース・満洲諸語に広くみられる接尾辞で、動作の開始を表わす（初めて、または中断後にその動作に進むことを意味する）：*tuksa-*「走る」、*tuksa-lu-*「走り出す」；*un-*「話す」、*u-lu-*「話し出す」；*panu-*「尋ねる」、*panu-lu-*「尋ね始める」；*gitu-*「徒歩で行く」、*gitu-lu-*「(幼児が) 歩き出す」(Petrova 1967: 91) ¹⁰

(2) *nalma geeda poodu bojo(n) sadaimba dapčiwəni*
nalma geeda poo-du bojo(n) sadai(n)-bA daptu+ri-bA-ni
 Nalma(PSN)¹¹ one place-DAT bear berry-ACC eat+IPFV.PTCP-ACC-3SG
itəgəčči, bəičiluxəni.
itə-kAčči bəiči-lu-xA(n)-ni
 see-SUB.CVB creep.toward.a.prey-lu-PFV.PTCP-3SG

「ナルマはある場所でクマがクロマメノキの実を食べているのを見つけて(それに) 忍び寄り始めた」(Petrova 1967: 91)

(3) *narisal bəijəl soriwačči itəčiluxəči.*
nari-sAl bəijə-l sori+ri-bA-čči itə-či-lu-xA(n)-či
 person-PL wild.animal-PL quarrel+IPFV.PTCP-ACC-3PL see-ITER-lu-PFV.PTCP-3PL

「人々は動物たちがあそんでいるのを観察し始めた」(Petrova 1967: 91)

周辺の出身ということを前提にしたのだと考えられる。T. I. Petrova が調査したのは 1936 年と 1949 年である (Petrova 1967: 3)。1936 年の調査対象者は 5 名で 30~35 歳、全員ロシア名を持つことが報告されている (ibid.)。したがって、生まれは 1900 年代前半から半ば、つまり 1905 年にサハリンの南半分が日本に割譲される直前から直後ということになる。実に微妙な時期だが、おそらく池上 (1994a [2001a]) は 1936 年にロシア名を持ってレニングラードに留学できたということから当時のソ連領だったサハリン北部の出身者と判断したのだろうと筆者は推測する。1949 年の調査対象者は 1 名で生年は不明だが、Petrova (1967: 3) によると Semen Pavlov という男性でロシア名である。1949 年はサハリン南部がソ連に再併合された後だが、南部出身のウイльтаは一樣に創氏改名させられ日本名になっていたことから、この話者は北部、すなわち北方言の地方の出身者とみられる。

⁹ Petrova (1967) は文中で動詞接辞に言及する際、“ $-lu-$ ” のように後ろにハイフンを付けない。以下、Petrova (1967) からの引用部に限り“ $-lu-$ ”となるのは、そのためである。筆者の見解では動詞接辞 $-lu-$ で語が終止することはないので、原則として音形の後ろにもハイフンを付している。

¹⁰ (1) (Petrova 1967: 91) でも述べられているとおり、動詞接辞 $-lu-$ に対応する形式はツングース諸語に広くみられる。Janhunen (2023) によるツングース祖語の記述でも、出動動詞をつくる派生接辞の一種として、下記のように紹介されている：“* $-lu$ for inchoatives (‘to begin’), as in **tügde-* ‘to rain’: INCH **tügde-lü-* ‘to start raining’ (>Udihe *tigde-li-*, Nanai *tugde-lu-*), (Janhunen 2023: 51 ; 表記ママ)。この点で、ウイльта語の動詞接辞 $-lu-$ が他言語 (ツングース諸語以外) からの借用形式である (または借用形式に由来する) 可能性は低いと考える。ただし、意味機能の変化に他言語の影響が及ぶことはありうるので、将来的に意味機能の考察を進めてゆく際には、他言語の影響も視野に入れたい。

¹¹ 以下、例文のグロスにおいて固有名詞や普通名詞の NOM (主格) は省略する。代名詞にのみ NOM を明示する。

Petrova (1967: 91)は、(2)の *baiči*-の逐語訳を「狩猟の際に野生動物に忍び寄る」、(3)の *itači*-の逐語訳を「見る」とした。筆者の分析では、(3)の *itači*-はさらに基本の語幹 *ita*-「見る、見える」と接辞-*či*- (ITER) に分析することができ「(継続的にじっくりと) 見る」ないし「観察する」行為を表わしていると解釈できる。そして、それぞれに-*lu*-が付いて、語幹の表わす動作や行為に《開始》の意味を加えている。

さらに、Petrova (1967: 91)は「語幹にこの接尾辞-*lu* を伴う現在時制の形式はしばしば未来の意味で用いられる」と述べた。(4)はその例文に当たる。なお、本稿の方針では不完了・形動詞語尾の基底形を-*ri* としているが、Petrova (1967)は“-*j*” というかたちも認めて記述している。(4)に限り、臨時で基底形を“-*j*” としておく。

- (4) *mapa učini: bi jadu putaččilleewi.*
mapa un-či(n)-ni: bi jadu putačči-lu+j-wi
 old.man say-PFV.PTCP-3SG 1SG.NOM this.DAT set.traps-lu+IPFV.PTCP-1SG
 「じいさんが言う、私はここに罠を仕掛ける、と」(Petrova 1967: 107)

(4)の引用部の述語 *putaččilleewi* における-*llee* の部分が「-*lu* を伴う現在時制の形式」に当たり、Petrova (1967: 107)はこれを-*lu*- + *j* > -*llee* と分析している。記述の方針も基底形の設定も本稿と異なるので注意が必要だが、Petrova (1967)の調査対象者がウイльта語を習得した頃(1900年代)の北方言に「-*lu*-を伴う現在時制の形式」として-*llee* という音形があったと認めて論を進める。

次に、Ozolinja (2013)は、Petrova (1967)などロシアで行われてきたウイльта語の研究をもとに、自身が1989～1994年にワール村で行った現地調査による情報も加えてまとめた文法書である。調査対象者の生年は1910～1940年である。日本の研究者による記述も参照されているが、北方言を中心とした記述といえる。

動詞接辞-*lu*-について、Ozolinja (2013: 66, 69)は、動詞語幹に付く接尾辞、すなわち出勤派生接尾辞の一種とし、「始める、語幹が表わす動作をし始める」を意味するとしている。未来の意味との関連についても上掲の Petrova (1967: 91)の記述や(4)を引用したうえで、「時制に関して、この開始の形式は現在時制であり、未来形ではない。強いて言えば、ただの現在時制ではない開始の形式が未来時制の機能で用いられるということだ」(Ozolinja 2013: 310)と述べた。つまり、(4)の-*llee* のような用例は、あくまで《開始》の現在時制だが、《未来》の意味を帯びる、ないし、《未来》指示の表現に用いられることがあるという。

1.3.2 Ikegami (1973 [2001a])、澗瀧 (1981) による南方言の記述

次に、Ikegami (1973 [2001a])、および澗瀧 (1981) による南方言の研究から、動詞接辞-*lu*-の記述を確認する。

Ikegami (1973 [2001a])は、1947年に旧日本領のサハリン南部から北海道へ移住したウイльта語南方言の話者(1910年生まれ)からの聴取にもとづき、「動詞語幹形成接尾辞」(1.1参照)を種類別に整理した論考である。Ikegami (1973 [2001a])のなかで-*lu*-は(5)のように説明され、起動相 (inchoative) の接尾辞と定義されている。

(5) これは起動相の接尾辞で、「ある動作を始める」ことを表わす。動詞語幹の後に現れる。母音や *p* や *n* で終わる動詞語幹にこの接尾辞が付く例がみられる。この接尾辞をともなう動詞語幹は 1.113 クラスに属する。語幹末の *n* は脱落し、語幹末の *p* には *tu* が付加される。以下、用例を示す：

simana-lu-「雪が降りだす」(: *simana*-「雪が降る」), *tugdā-lu*-「雨が降りだす」(: *tugdā*-「雨が降る」), *tugbu-lu*-「～を落とし始める」(: *tugbu*-「～を落とす」), *tā-lu*-「座り始める」(: *tā*-「座る」), *elē-lu*-「～をゆで始める」(: *elē*-「～をゆでる」), *kā-lu*-「話し始める」(: *kān*-「話す」), *dāptu-lu*-「食べ始める」(: *dāp*-「食べる」), *bi-lu*-「(どこかに) 居始める」(: *bi*-「居る」) (Ikegami 1973 [2001a: 81]; 日本語訳は筆者による)

なお、(5)の文中の「1.113 クラス」は Ikegami (1959 [2001a])が提示した活用変化表における分類で、語幹末が-VCu- (Vは母音、Cは子音) のタイプを指す (Ikegami 1959 [2001a: 24, 42])。

次に、潤瀉 (1981) は、戦前に日本領樺太・敷香 (今日のポロナイスク) 郊外のオタスで行った現地調査を基礎とし、戦後に行った文献調査や池上二良からの学術的な助言、北海道に居住したウイльта語話者から聴取した情報を加えて編纂された辞典である。経緯から判断して、基本的には南方言の辞書といえる。接辞や語尾などの付属形式も見出しにしておき、例文も充実している。

動詞接辞-*lu*-について、潤瀉 (1981) は、「-*luxa(xə)ni -llini*」という見出し語のもとで(6)のように記述した。潤瀉 (1981) は Petrova (1967)を参照して情報をまとめており、(6)には(1)の内容も一部反映されているようだが、そのまま引用することとする。

(6) -*luxa(xə)ni -llini* (動詞接尾辞) 動作の始動, …し始める, *xəduuččini -xəduuluxəni xəduullini* 風が吹く—風が吹き始める, *simanaxani -simanaluxani* 雪が降る—雪が降り出す, *getuxani -getuluxani* 歩く—歩き始める (幼子が歩き出す), *putačixani -putačiluxani* 罌をかける—罌をかけ始める, *kəččini -kəluxəni* 話す—話し出す, *biččini -biluxəni* 暮らす—暮らし始める, *itəptuxəni -itəptuluxəni* 見える—段々見えてくる (潤瀉 1981: 123)

潤瀉 (1981: 123) は-*lu*-に完了・形動詞語尾-*xA(n)*が後続する-*luxA(n)*と、不完了・形動詞語尾-*ri*が融合する-*lli*の意味を区別しておらず、どちらも「～し始める」と訳している。潤瀉 (1981) にその理由が述べられていないので詳細は明らかではないが、動詞接辞-*lu*-が《開始》の意味を添える形式であることを支持する点では、Petrova (1967)やIkegami (1973 [2001a])と共通する。

1.4 南方言における-*lu*-の用例

北方言の用例観察の前に、先行研究からもう少し南方言の用例を確認しておきたい。(7)は口承文芸テキストからの抜粋、(8)(9)は辞書の記述である。

- (7) *məə doon soktoonjinee, məə doon*
məə doo-ni soktoo(n)-ri-ni+kAA məə doo-ni
 water inside-3SG become.muddy-IPFV.PTCP-3SG+EXC water inside-3SG
soktooluxanee,...
soktoo(n)-lu-xA(n)-ni+kAA
 become.muddy-*lu*-PFV.PTCP-3SG+EXC

「みずのなかがにごってくるぞ、みずのなかがにごりはじめたぞ」(池上 2002: 28)

- (8) *billi-ni* v.[perf. *biluxə-ni*] い(居)はじめる(これからいる)(池上 1997: 21)
 (9) *ɣənəlli-ni* v.[perf. *ɣənəluxə-ni*] 行くことをはじめる(池上 1997: 143)

(7)では、(水が)「濁ってくる」という状態変化が始まって現在も進行していることが読み取れる。(8)(9)は文脈がないので客観的な意味解釈が難しいが、-*lu*-が状態動詞にも動作動詞にも付くこと、そして池上(1997)が一貫して-*lu*-を起動相で解釈していることが確かめられる。

2. 北方言における-*lu*-の用例

2.1 用例の分類について

第2節では、1990年代以降¹²に北方言で採録された資料のなかから動詞接辞-*lu*-の用例を抽出し、後続する活用語尾ごとに整理して観察する。すなわち、完了・形動詞語尾-*xA(n)*が後続する場合(2.2)、不完了・形動詞語尾-*ri*が後続する場合(2.3)、未来・形動詞語尾-*li*が後続する場合(2.4)の順でみてゆく。

以下で紹介する用例は、下記の4名の北方言話者による。以下、各例文の末尾(出典がある場合は出典の後)で話者の略号と採録年を明示する(例えば、[OS1991]はO. N. Semjonovaから1991年に採録された用例)。ただし、本文中はその限りではない。

- Ol'ga Nikolaevna Semjonova (1910-1995) → 略号 OS
- Anna Vasil'evna Semjonova (1919-1993) → 略号 AS
- Irina Jakovlevna Fedjaeva (1940-) → 略号 IF
- Elena Alekseevna Bibikova (1940-) → 略号 EB

2.2 完了・形動詞語尾-*xA(n)*が後続する場合

2.2.1 完了・形動詞語尾-*xA(n)*が後続する場合(1): -*luxA(n)*-PERS

下記の(10)~(14)は動詞接辞-*lu*-に完了・形動詞語尾-*xA(n)*と人称語尾が後続し、それ自体で述語が完成する例である¹³。

¹² 1990年代は、ソ連崩壊後に池上二良が自身として初めてサハリンで現地調査を行い、サハリン北部で話されるウイльта語の記録・記述に着手し、方言分類を提案した時期である。それまでは方言が区別されていなかったため、ウイльта語北方言の記述研究は、実質この時期に池上によって始まったとみてよい。したがって、本稿の考察対象とする「1990年代以降」とは、ウイльта語北方言が北方言として記録され始めてから2023年12月現在まで、を意味する。

¹³ 人称語尾の後に倚辞が付く例もあるが、ここでは例示を省略する。

- (10) *tamačču buu uiləluxəpu.*
tamačču buu uilə-lu-xA(n)-pu
 from.there 1PL.NOM work-lu-PFV.PTCP-1PL
 「それから、私たちは仕事(調査)を始めた」(山田 2012: 162; 2013: 163 ; 一部改訂) [IF2011]
- (11) *gə, itadakimas ugəččeeri dəptuluxəpu.*
gə, [itadakimas] u(n)-kAččeeri dəptu-lu-xA(n)-pu
 INTJ let's.eat say-SUB.PL.CVB eat-lu-PFV.PTCP-1PL
 「さて、『いただきます』と言って食べ始めた」(山田 2013: 157; 2014: 110) [EB2010]
- (12) *i eto tamnaska tamnaluxani.*
[i] [eto] tamnaska tamna-lu-xA(n)-ni
 and that fog get.foggy-lu-PFV.PTCP-3SG
 「そして霧がかかりはじめた」(池上 2002: 111) [AS1990-1992]
- (13) *i... tari, anu naani... arpunduwadu, piləttu naaduni*
[i] tari anu naa-ni arpunduwa-du piləttu naa-du-ni
 and that.NOM FIL land-3SG Arpunduwa(PLN)-DAT Pil'tun(PLN) land-DAT-3SG
bii... tari xusə nəu-bi ənu-lu-xə-ni. tamačee
bii tari xusə nəu-bi ənu-lu-xA(n)-ni tamačee
 1SG.NOM that.NOM male younger.brother/sister-1SG be.ill-lu-PFV.PTCP-3SG like.that
ǰij suddəki ənu bičči-ni, kokljush.
ǰij suddəki ənu bičči(n)-ni [kokljush]
 very terrible illness COP.PFV.PTCP-3SG pertussis
 「そして、それはあの土地、アルプンドウワで、ピリトゥンのあたりで私のその弟が病気になった。このようなとても恐ろしい病気だった、百日咳だ。」(森貝 2016: 152 ; 基底形追加、グロスを本稿の形式に合わせて改変) [EB2010] ¹⁴
- (14) *bii mərəččiwi seejiluxambi.*
bii mərəči+ri-wi seeji-lu-xA(n)-bi
 1SG.NOM think+IPFV.PTCP-1SG have.a.cold-lu-PFV.PTCP-1SG
 「私は風邪をひいたようだ」(2019年ユジノサハリンスク市にて、金周源(ソウル国立大学)の調査チームが北方言話者 E. A. Bibikova から採録した例文) [EB2019]¹⁵

(10)(11)では「仕事をする(働く)」「食べる」という動作・行為を表わす動詞に、(12)では「霧がかかる」という状態変化を表わす動詞に、接辞-*lu-*が《開始》の意味を加えている。(13)(14)は「病気である」「風邪をひいている」という状態を表わす動詞に-*lu-*が付いて、その状態になること、すなわち状態の《開始》と解釈できる¹⁶。

¹⁴ 2010年に風間伸次郎が E. A. Bibikova から録音したデータを森貝聡恵がテキスト化して発表した資料(森貝 2016: 143 参照)。

¹⁵ ロシア語訳は «Мне кажется, я простудился» とされる(朴相澈 p.c.)。あくまで他の例文同様、基底形とグロス、および(提供いただいたロシア語訳からの)日本語訳の責任はすべて筆者にある。

¹⁶ 厳密には、(13)で「病気になった」弟はのちに亡くなっており(森貝 2016: 153 参照)、病気の状態は発話時点までは続いていない。(14)は文脈がないので、「風邪をひいた」話し手(=一人称の「私」)がその後ど

上記の例では多少の用法の違いこそあれ、いずれも 1.3 でみた先行研究の指摘に矛盾せず、1.4 で確認した南方言の用例とも共通する特徴が示されている。

2.2.2 完了・形動詞語尾-*xA(n)*が後続する場合(2) : -*luxA(n)*(-PERS)#*bi*-

他方、動詞接辞-*lu*-に完了・形動詞語尾が付き、さらにコピュラ動詞 *bi*-の活用形を後続する事例が確認された。以下、この形式を-*luxA(n)*(-PERS)#*bi*-と記号化する（人称語尾は付かないことと付くことがあるので括弧に入れる）。

下記(15)(a)(b)は提示するロシア語を訳した場合どうなるかを話者 2 名に尋ねて得られた例文である。翻訳作業は話者ごとに異なる日時・場所で行った。

(15) Она должна была сделать эту работу. 彼女はこの仕事をするようになっていた。

- | | | | | | |
|-----|-----------------------|---------------------------|--------------------|---------------------------|--------------------|
| (a) | <i>nooni</i> | <u><i>anduluxa</i></u> | <i>biččini</i> | <i>jəə</i> | <i>uiləkkoo</i> . |
| | <i>nooni</i> | <i>andu-lu-xA(n)</i> | <i>bičči(n)-ni</i> | <i>jəə</i> | <i>uilə-kku+bA</i> |
| | 3SG.NOM ¹⁷ | make- <i>lu</i> -PFV.PTCP | COP.PFV.PTCP-3SG | this.OBL | work-NMLZ+ACC |
| (b) | <i>nooni</i> | <i>jəə</i> | <i>uilləə</i> | <u><i>anduluxa</i></u> | <i>biččini</i> . |
| | <i>nooni</i> | <i>jəə</i> | <i>uilə+bA</i> | <i>andu-lu-xA(n)</i> | <i>bičči(n)-ni</i> |
| | 3SG.NOM | this.OBL | work+ACC | make- <i>lu</i> -PFV.PTCP | COP.PFV.PTCP-3SG |

(山田 2017b: 123) [(a): [IF2010-2013], (b): [EB2010-2013]]

どちらの話者もロシア語の «должна была»（～するようになっていた）を、-*luxa biččini* と訳した。主語に一致する三人称の語尾はコピュラの後ろに付いている。(a)(b)とも、もとのロシア語から逐語的に訳された可能性が大きいですが、そうだとした場合、前節(2.2.1)でみた-*luxA(n)*-PERS だけで述語をかたちづくる形式とは明らかに異なる。

下記(16)(17)は上記(15)(b)と同一の話者から得られた作例で、採録方法は(15)と同様である。以下、(15)同様の方法で採録された例文について、日本語訳の後に、媒介となったロシア語を（ ）内に補足する。

うなったのかわからない。

¹⁷ Ikegami (1968 [2001a: 134])によると、南方言における三人称代名詞 *nooni* は、一つの文脈の中に現れる 2 種類の有生物のうち的一方を指すために用いられるという。Ikegami (ibid.)により、この用法は北米のアルゴンキン語族にみられる *obviative* と共通するとされた。のちに風間 (2007) はウイльта語だけでなく他のツングース諸語についてもテキストを調べて検討し、ウデヘ語とナーナイ語でも同様の特徴がみられると指摘した。風間 (2007: 184) はこれを「四人称としての性格」と呼んだ。ただ、筆者は現地調査でウイльта語北方言の三人称代名詞 *nooni* (複数形は *nooči*) に同様の特徴を確認できていない。この問題について、近年の北方言における状況判断は今後の課題とし、グロスのうえでは当面「三人称」としておく。

- (16) *nooni* *isuluxa* *biččini* *obeedutai.*
nooni *isu-lu-xA(n)* *bičči(n)-ni* *obeedu-tAi*¹⁸
 3SG.NOM come.back-lu-PFV.PTCP COP.PFV.PTCP-3SG lunch-DIR
 「彼女は食事（昼食）のころ戻って来ることになっていた（Она должна была вернуться к обеду.）」 [IF2010]¹⁹
- (17) *nooni* *ərtə* *sindaluxa* *biččini.*
nooni *ərtə* *sinda-lu-xA(n)* *bičči(n)-ni*
 3SG.NOM soon come-lu-PFV.PTCP COP.PFV.PTCP-3SG
 「彼はもうすぐ来るはずだ（Он должен скоро прийти）」 [EB2010]

(15)(16)(17) のロシア語原文を比較すると、(15)(16)で付いている *была*（コンピュータの過去・女性形）が、(17)にはない（(17)の場合、付くとすれば男性形で *был* となったはずだが）。ウイльта語ではどの例にもコンピュータ動詞 *bi-*の完了・形動詞・三人称単数形 *biččini* が付いている。意味上は、(15)(16)では *-lu-*に先行する動詞が表わす行為（*andu-*「つくる、する」、*isu-*「戻って来る」）が実行される時点と発話時点との前後関係が明示されないのに対し、(17)ではその行為（*sinda-*「来る」）が実行されるのは発話時点から少し先の《未来》と予想されている。このような意味上の違いをロシア語では述語部分が形式で示しているが、ウイльта語において述語部分の形式は同じである。

下記(18)はモノローグの一部で、予定よりも早く帰宅した人たちに向かって（家で留守番していた）家族が発したセリフである。モノローグの発話にロシア語を媒介していない。

- (18) *orooi*, *jij* *kusal* *isuxasooči.*
orooi *jij* *kusal* *isu-xA(n)-su+kAA=či*
 INTJ very quick come.back-PFV.PTCP-2PL+EXC=?²⁰
čimanaa *čijaapani* *isuluxasu* *bitəəči.*
čimanaa *čijaapani* *isu-lu-xA(n)-su* *bi-tAA=či*
 tomorrow after.tomorrow come.back-lu-PFV.PTCP-2PL COP-EVD.PST.FIN=?
 「まあ、あなたたち、ずいぶんはやく帰ってきたのね！ 明後日戻って来るはずだったでしょう」 [IF2010]²¹

¹⁸ この語の名詞語幹 *obeedu* はロシア語の *обед* をウイльта語らしき音形に直したもので、さらにウイльта語の格語尾 *-tAi* (DIR) が付されている。ウイльта語風に発音して、ウイльта語の文法規則で格変化させているという点で、ロシア語の単語そのものの挿入 (cf. (12)(13)) というよりは、ロシア語からウイльта語への音訳と判断したい。そのため、この *obeedu* は [] で括らない。

¹⁹ 以下、例文後に典拠の標示がないものはすべて、2008 年以降に筆者が採録したが未公開の資料である。そのうち(16)(17)(21)(22)の採録には、風間伸次郎が作成した例文調査票を使用した。この 4 例を含むウイльта語例文集は、できるだけ近いうちに整理して公開したいと考えている。

²⁰ (18) で 2 度現れる *=či* は、この話者が語気を強める時にしばしば用いる。筆者の観察では、常に文末（述語の末尾）に付き、日本語の終助詞のようなふるまいを見せる。接辞や活用語尾のようなものではなく、倚辞とみられる。しかし、他の話者からは未だ確認しておらず、意味機能の体系的な検討は未着手なので、ここでは *グロス* を *=?* としておく。

²¹ (18) ではウイльта語のモノローグを採録した後で、筆者が文字起こしを行い、話者にテキストを見せながらロシア語訳を付してもらった作業を行った。その際に得られた(18)のロシア語訳は «Ой очень быстро же

(15)(16)(17)とは少し違って、(18)では-*luxA(n)*の後に二人称複数⁶が標示され、後続するコピーに体験過去の標示がある。(18)では-*lu*-に先行する動詞の表わす行為が、発話時点よりも先の《未来》に実行される見通しが示されている点では(17)と共通する。

下記(19)は、1991年に池上二良がサハリン州ワール村で採録した歌謡の一部である。歌い手は故 O. N. Semjonova、ウイльта語の歌詞を解釈してロシア語に訳したのは E. A. Bibikova である。E. A. Bibikova は 1991 年の池上の現地調査に付き添い補助をした話者の一人で、このデータの採録に立ち会っていた。この歌謡は故 O. N. Semjonova の持ち歌だったそうで (I. Ja. Fedjaeva, p.c.)、もともとウイльта語で創作されたもの（ロシア語を媒介しない）とみられる。

- (19) *taagda gauna(x)i ojudunee*
taagda gauna(x)i ojo-du-ni+kAA
 white hill surface-DAT-3SG+EXC
 「白い丘の上でね」
xalačiluxa *biččinee*
xalači-lu-xA(n) *bičči(n)-ni+kAA*
 wait-*lu*-PFV.PTCP COP.PFV.PTCP-3SG+EXC
 「(彼は) 待つことになっていたのね」
goroo ənənə(ə) əččini xalaččee
goro ənənə əčči-ni xalači+rA
 long INTJ NEG.PFV.PTCP-3SG wait+NIPFV.PTCP
 「長くて、あらら、待ってられなかったのね」
biiddə əsiwi xalaččee
bii=ddAA ə-si-wi xalači+rA
 1SG.NOM=EMPH NEG-IPFV.PTCP-1SG wait+NIPFV.PTCP
 「私だって待ちませんよ」
duktakki ηänniləmi
duku-tAkki ηənə+rilA-mi
 home-REF.DIR go+NFUT.FIN-1SG
 「(私は自分の) おうちに帰りましょう」

(Mamcheva & Bibikova 2013: 58-59) [OS1991]²²

これと同じ音声資料は採録者である池上自身も資料化しており、池上 (2002: 126-127) で (19)の下線部を「彼は(しかたなく) 待っていたのね」と訳している。同じ部分の Mamcheva & Bibikova (2013: 59)によるロシア語訳は «должен был подождать» すなわち「(彼は) 待つことになっていた」「(彼は) 待たなければならなかった」である。ニュアンスの違いがある

вы вернулись! Послезавтра вернуться должны были.» (下線部は-*lu*-を含む述語部分に対応)であった。

²² (19)の中の改行は書式の都合で加えたもので、歌謡の節や旋律と直接の関連はない。

が、池上の現地調査に付き添った E. A. Bibikova らの仲介（訳付け補助）が反映されていると筆者は推測する。歌手 O. N. Semjonova の解釈も含まれるかもしれない。いずれにせよ、池上も E. A. Bibikova も「待ち始めた」という《開始》の意味では訳さなかった。

以上(15)~(19)でみた *-luxA(n)(-PERS)#bi-* という形式は、上述 (2.2.1) の *-luxA(n)-PERS* だけで述語が完成する形式とは意味の上でも異なるようにみえる。何らかの別の用法とみるべきではないだろうか。

2.3 不完了・形動詞語尾 *-ri* が後続する場合

2.3.1 不完了・形動詞語尾 *-ri* が後続する場合(1) : *-lee-PERS*

次に、2.3 節では動詞接辞 *-lu-* に不完了（現在）の形動詞語尾 *-ri* が付く例を観察する。

1990 年以降の北方言資料では、Petrova (1967) が指摘した *-lee* (1.3.1 参照) の用例が確認できなかった。

2.3.2 不完了・形動詞語尾 *-ri* が後続する場合(2) : *-lli-PERS*

他方、(**-lu-ri*>)-*lli* とみられる用例はあるが、非常に少なく、筆者が確認できたのは今のところ以下の 2 例のみである。(20)は池上二良が採録した北方言テキストの一部で、音声付きで公開されている。(21)は筆者が E. A. Bibikova から得た例文で、ロシア語からの翻訳による作例である。

(20) *mamaŋubi* *xooni onbollini.*
mama-ŋu-bi *xooni onbo-lu+ri-ni*
old.woman-AL-REF.SG how forget-*lu*+IPFV.PTCP-3SG
「自分のつれあいをどうしてかれが忘れる」(池上 2002: 118) [OS1991]

(21) *namallini.*
nama-lu+ri-ni
be.warm-*lu*+IPFV.PTCP-3SG
「暖かくなってきた (Теплеет)」 [EB2010-2013]

(20)の下線部の発音では重子音 *ll* が明確でなく、筆者の聴取では単子音で *onbolini* と表記しても差し支えなさそうである。池上 (2002: 118) が重子音としたのは、理論的要請によるものではないだろうか。(21)は作例として可能だとして、どこまで自然なのか慎重にみる必要がある。さらに(20)同様、母音間の重子音 *ll* と単子音 *l* の違いは微妙で判断が難しく、話者ですら調査者に判断を委ねるほどである。したがって、(21)もまた、この表記で正しいといえるかどうか疑問が残る。

以上の 2 例は、聴き取り調査や音響分析が不徹底という問題もあり、本当に *-lu-* と *-ri* の融合形 *-lli* の例なのか疑わしい。近年の北方言で *-lu-* と *-ri* の同一語内での共起がどのくらい許容されるのか、慎重に判断する必要がある。

2.4 未来・形動詞語尾-*li*が後続する場合：-*luli*-PERS

次に動詞接辞-*lu-*に未来・形動詞語尾-*li*が付く例を観察する。

近年の北方言のデータから該当例を同一話者から3例確認した。(22)~(24)がそれである。(22)(23)はロシア語からウイльта語に訳してもらうことによって得た作例、(24)はモノローグからの抜粋で、発話時にロシア語を媒介していない。

(22) *tugdəlulini* _____ *taani*.

tugdə-lu-li-ni _____ *taani*

rain-*lu*-FUT.PTCP-3SG PTCL

「きっと雨が降るだろう (Возможно, будет дождь)」(山田 2015: 56) [IF2010-2013]

(23) *nooni* _____ *saahulini* _____ *čawa*.

nooni _____ *saa-lu-li-ni* _____ *čawa*

3SG.NOM know-*lu*-FUT.PTCP-3SG that.ACC

「彼はこれを知るべきだ (Он должен знать это)」(山田 2016: 53) [IF2010-2013]

(24) *bii* _____ *uiləluliwi* _____ *čawwu* _____ *ananiŋidu*.

bii _____ *uilə-lu-li-wi* _____ *čawwu* _____ *anani-ŋi-du*

1SG.NOM work-*lu*-FUT.PTCP-1SG next year-?-DAT²³

「私は来年働き始める」[IF2010]

(22)の文末の付属語 *taani* は、南方言でも「～らしい」(潤瀉 1981: 204)、「でしょう、だろう」(池上 1997: 196)とされる形式で、2008年以降に筆者の採録した北方言テキストでも多用される(山田 2013 掲載テキスト参照)。山田(2013)では《推量》と分析した。(22)では付属語 *taani* がロシア語の *возможно* (きっと～だろう)に対応していると解釈できる。この解釈に立てば、《推量》のようなモーダルな意味は付属語が担っており、*tugdəlulini* の-*luli*の部分では未来に《開始》される出来事が表されていると考えられる。

他方で、(23)はロシア語の *должен* (～するべきだ)から訳出されているが、「～するべきだ」のようなモーダルな意味を担いそうな形式が-*luli*の部分以外に見当たらない。

(24)は分析も訳付けも筆者による。音形と訳は口頭で筆者があとで大まかに訳したものを聞いてもらっただけだった。ロシア語を媒介していない点で貴重だが、ここに(22)や(23)のように何らかのモーダルな意味が含まれていたかどうか、もっと精査すべきだった。

3. まとめと補足

前節では、1990年代以降に採録されたウイльта語北方言における動詞接辞-*lu-*の用例を観察した。この作業は、データの少なさや調査の不徹底という問題も顕在化する。あくまで小規模なデータの範囲内という認識のうえで結果を概観すると、表2のようになる。

²³ *anani-ŋi-du* の-*ŋi-*は、形式もふるまいも譲渡可能接辞-*ŋu-*と酷似している((20)参照)が、母音が異なる理由が筆者にはわからない。そのためグロスに-?-とした。

表2 ウイルタ語北方言（1990年代以降）の形動詞述語における動詞接辞-*lu*-の用例概観

節番号	後続する活用語尾	参照した例文	形式	備考
2.2.1	-xA(n) (PFV.PTCP)	(10)~(14)	-luxA(n)-PERS	
2.2.2		(15)~(19)	-luxA(n)(-PERS)#bi-	
2.3.1	-ri (IPFV.PTCP)	-	-llee-PERS	対象年代で実例を確認できない
2.3.2		(20)(21)	-lli-PERS	2例あるが不確実
2.4	-li (FUT.PTCP)	(22)~(24)	-luli-PERS	同一話者から3例

ここまでのところ 2.2.2 でみた *-luxA(n)(-PERS)#bi* の形式だけはコンピュータ動詞 *bi* の活用形を後続する点で特異である。2語にまたがっており、表わされる意味を考えるには、形態素や単語でなく、構文として捉え直す必要がある。以下、仮に *-luxA(n)(-PERS)#bi* 構文と呼んでおく。

補足として、*-luxA(n)-PERS* と *-luxA(n)(-PERS)#bi* 構文の違いについて、2023年11月に SNS のチャット機能で E. A. Bibikova から得た作例(25)~(27)と、その説明内容を報告する。

説明を受けるため、まず筆者から *-luxA(n)(-PERS)#bi* 構文で “*tari nari čadu xalačiluxa biččini*” という作例を差し出して、この文が自然であるかどうかを確かめつつ、意味を尋ねた。E. A. Bibikova はこの文を容認し、«Тот человек там должен был ждать» 「その人はそこで待つことになっていた」というロシア語訳を付けた。そこで筆者が《開始》の意味でないことを確かめようとしたところ、もし《開始》を表わしたいならば、と提示されたのが(25)である。2.2.1 でみた *-luxA(n)-PERS* のタイプに当たる。

(25) *nooni čadu xalačiluxani.*
nooni čadu xalači-lu-xA(n)-ni
 3SG.NOM that.DAT wait-lu-PFV.PTCP-3SG
 「彼はそこで待ち始めました (Он там начал ждать)」 [EB2023]

(25)を得たあと、*-luxA(n)(-PERS)#bi* 構文の場合に、主語がその動詞語幹が指す行為を完遂するのかどうかを確かめるため、筆者から “*nooni dolbodoloo xalačiluxa biččini*” という作例を差し出して、この場合の *nooni* 「彼」が *dolbodoloo* 「夜まで」待っていたかどうかを尋ねた。E. A. Bibikova の回答は、待っていなかったかもしれないし、待っていたかもしれない。待っていなかった場合は(26)のように、待っていた場合は(27)のように後の文脈を補う、ということだった。以下(26)(27)の各前半部は筆者が差し出した上記の作例を容認した内容で、各後半部は E. A. Bibikova 自身による。

(26) *nooni dolbodoloo xalačiluxa _____ biččini.*
nooni dolbodoloo xalači-lu-xA(n) bičči(n)-ni
 3SG.NOM until.night wait-lu-PFV.PTCP COP.PFV.PTCP-3SG

anaa, əččini xalaččee, ηənuxəni.
 anaa əčči(n)-ni xalači+rA ηənu-xA(n)-ni
 no NEG.PFV.PTCP-3SG wait+NIPFV.PTCP go.back-PFV.PTCP-3SG

「彼は夜まで待つことになっていました。ところが待たないで帰ってしまいました」
 [EB2023]²⁴

(27) nooni dolbodoloo xalačiluxa biččini.
 nooni dolbodoloo xalači-lu-xA(n) bičči(n)-ni
 3SG.NOM until.night wait-lu-PFV.PTCP COP.PFV.PTCP-3SG
 taree xalaččeeekkaa goči.
 tari+kAA xalači+rAkkA+kAA goči
 that.NOM+EXC wait+EVD.PRS.FIN+EXC PTCL

「彼は夜まで待つことになっていました。ほらあれ！[今も]待っていますよ」[EB2023]²⁵

つまり、E. A. Bibikova の内省では、-luxA(n)(-PERS)#bi-構文はその行為の未遂や完遂を含意しないようだ。できれば対面してさまざまな文脈で調べたいところである。

さて、-luxA(n)(-PERS)#bi-構文のコピュラをどのように考えればよいだろうか。表1でみた動詞複合体の基本的な構成に照らすと、コピュラは付属語の位置に置かれるが、活用や人称標示をするという点で付属語とは区別すべきである。この問題について、今のところ思い当たる解決方法は2種類ある。

一つめの解決方法は、コピュラに先立つ-luxA(n)(-PERS)を述語動詞ではなく、名詞的または形容詞的なものとして捉え直すことである。それならば、-luxA(n)(-PERS)の形動詞とコピュラ動詞をそれぞれ動詞複合体とみれば良いので、表1との矛盾はない。もともと形動詞は名詞的にも形容詞的にもふるまえるので、この考え方には可能性が十分あると思われる。

二つめの解決方法は、-luxA(n)(-PERS)#bi-構文を（基本を逸脱した）《特殊》な、あるいは《新しい》構文とみなすことである。例えば、エウエンキー語からウイルタ語北方言への借用形式とみられる動詞語尾-bukki²⁶のあとにコピュラを補えることが、池上（1994a [2001a: 251-252]）によってすでに指摘されている。もともと表1の考え方は（20世紀前半のサハリン南部で習得され戦後の北海道で採録された）南方言の研究の蓄積のうえに成り立っているので、接触言語やロシア語の影響による変化も考慮すると、北方言では記述の枠組みを少しずつ見直してゆくべきなのかもしれない。

今後は、動詞の後に補われるコピュラがどのような役割を果たしているかという問題を

²⁴ (26)に E. A. Bibikova が付したロシア語訳：Он до ночи должен был ждать, но не дождался, ушёл.

²⁵ (27)に E. A. Bibikova が付したロシア語訳：Он до ночи должен был ждать – вот он ждёт же.

²⁶ 池上（1994a [2001a]）は-bukkiを「動詞語尾」と呼び、活用語尾のなかでも種類を特定しなかった。山田（2013: 96-97, 120-125）も、人称標示が他のどれとも異なることなどを理由に、形動詞にも定動詞にも特定せず、単に「習慣」と呼ぶにとどまった。池上（1994a [2001a: 252]）は「-bukkiのついた動詞形は、多くの場合、ある行動が習慣的にくりかえしおこることを表し、また文を終結させるはたらきをもつ。また、あとに bičči（あった）をとまうことによって、その行動が過去におきたことを表す」と述べ、コピュラ動詞の完了・形動詞形が《過去》の意味を補うことを示唆した。山田（2013: 120-125）もこのことについて考察し、コピュラ動詞の完了・形動詞形がともなう例のほか、体験過去・定動詞形が補われる例もあることを紹介した。

含め、文法全体を視野に、動詞語尾-*lu*-の意味機能の点に考察を進めてゆきたい。

4. 結論と今後の課題

本稿では、ウイлта語北方言における動詞接辞-*lu*-について、先行記述を概観したのち、特に1990年代以降の資料から用例を抽出して観察した。結果として、動詞接辞-*lu*-に完了・形動詞語尾-*xA(n)*を付ける用例のなかに、コピュラ動詞 *bi*-の活用形を補う構文 (-*luxA(n)* (-PERS)#*bi*-構文と仮称した) があることを確かめた。動詞接辞-*lu*-に不完了・形動詞語尾-*ri*を付ける用例、および未来・形動詞語尾-*li*を付ける用例については、それぞれに一次データ段階での問題が含まれるものの、それらしきものが数例ずつ観察された。

本稿では用例の提示と形式の観察に重点を置き、意味機能の考察には踏み込まなかった。それでも、先行研究が動詞接辞-*lu*-に《開始》の意味、ないし起動相というアスペクト機能を認めていること、および、1990年代以降の北方言でも同様の解釈ができる例を、とりわけ動詞接辞-*lu*-に完了・形動詞語尾-*xA(n)*と人称語尾を付けて述語を完成する用例のなかで確認した。他方で、起動相だけでは説明しがたい-*luxA(n)* (-PERS)#*bi*-構文のような例があることもわかってきた。Petrova (1967), Ozolinja (2013)の記述から、動詞接辞-*lu*-に不完了・形動詞形が《未来》指示のテンスを帯びる可能性を確認した。さらに、-*luxA(n)* (-PERS)#*bi*-構文と、未来・形動詞語尾-*li*を付ける一例(23)では、モダリティとの関連が、漠然とではあるが見えてきたところである。

今後、動詞接辞-*lu*-の意味機能の考察に向かってゆくために、下記の点が課題として挙げられる。

- (可能な限り) 一次データの収集
- 収集済みデータの資料化・公開、コーパスの整備
- (テンス、アスペクト、モダリティを含む) 体系的な考察 (どの形式がどの意味機能を担うか)
- 動詞述語の後にコピュラ動詞 *bi*-の活用形をとまなう場合に、コピュラ動詞の活用形はどのような機能を果たすか (コピュラ動詞そのものの機能の検討を含む)
- ツングース諸語において動詞接辞-*lu*-の対応形式がどのように用いられるか
- -*luxA(n)* (-PERS)#*bi*-構文や動詞語尾-*lu*-の他の用法に、他言語 (ツングース諸語以外の諸言語を含む) との類似や影響関係がみられるかどうか

検討を進めてゆけば別の課題も次々と出てくるだろう。そのような課題を徐々に解決し、ウイлта語の動態を少しでも明らかにすることを将来的な目標とする。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K18668 (2023-2024 年度) の助成を受けている。2009-2014 年度にかけて以下の助成を受けて実施した現地調査の成果も含む：(年度順に) JSPS 科研費 JP09J02110 (2009-2010 年度)、JSPS 優秀若手研究者海外派遣事業 (2010 年度)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特別経費「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」による研究未開発言語調査派遣 (2011 年度)、岡田宏明基金 (2012 年度)、JSPS 科研費 JP223020075 (代表：津曲敏郎、2010-2014 年度 [調査実施は 2013, 2014 年度])。

本稿は、日本北方言語学会第 6 回大会における口頭発表 (山田 2023) で提起した課題の一つを掘り下げるものである。発表を聴いてくださった皆様、貴重なコメントをくださった皆様に感謝申し上げる。筆者の主な現地調査協力者でインフォーマントである Irina Jakovlevna Fedjaeva さん、Elena Alekseevna Bibikova さん、ご厚意により未公開のウイльта語データの一部を共有してくださった朴相澈先生 (ソウル国立大学)、英文サマリーについてご助言くださった John Guy Perrem 先生 (室蘭工業大学)、そして、拙文を深く丁寧に読み解いて的確で建設的なコメントをくださった匿名の査読者各位にも、心より御礼申し上げます。

略号一覧

- : 形態素境界 / + : 融合 / = : 倚辞境界 (ただし、本記号の前方は語幹または語尾) / # : 語境界 * / [] : 他言語の挿入 / ? : 現段階では不詳 (分析を保留) / 1 : 一人称 / 2 : 二人称 / 3 : 三人称 / ACC : 対格 / AL : 譲渡可能 / COOR : 同時 / COP : コピュラ / CVB : 副動詞 / DAT : 与格 / DIR : 方向格 / EMPH : 強調 / EVD : 証拠性 (直接体験) / EXC : 感嘆 / FIN : 定動詞 / FIL : フィラー / FUT : 未来 / HBT : 習慣 / IPFV : 不完了 / INCH : 起動 (Janhunen (2023) からの引用でのみ使用) / INTJ : 間投詞 / ITER : 反復 / NEG : 否定動詞 / NFUT : 近い未来 / NIPFV : 否定に伴う不完了 / NMLZ : 名詞派生 / NOM : 主格 (代名詞のみで明示する) / OBL : 斜格 (指示形容詞のみで明示する) / PERS : 人称語尾 * / PFV : 完了 / PL : 複数 / PLN : 地名 / PRS : 現在 / PSN : 人名 / PTCL : 付属語 / PTCP : 形動詞 / REF : 再帰所有 / SG : 単数 / SUB : 従属

*付きの略号は本文、表、節タイトルで形式を記号化する際に用いる。例文のグロスでは用いない。

参考文献

- Ikegami, J. (1959) The verb inflection of Orok. 『国語研究』9: 34-73, 国学院大学国語研究会 [池上 (2001a: 24-66)所収].
- Ikegami, J. (1968) The Orok Third Person Pronoun *nooni*. *Ural-Altische Jahrbücher*. 40(1-2): 82-84 [池上 (2001a: 131-135)所収].
- Ikegami, J. (1973) Orok verb-stem-formative suffixes. *Hoppo Bunka Kenkyu, Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures Hokkaido University*. 7: 1-17 [池上 (2001: 73-93)所収].
- Ikegami, J. (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und*

- Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin.* 271-272. Berlin: Akademie-Verlag [池上 (2001a: 395-396) 所収].
- 池上二良 (1994a)「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38, 網走: 北海道立北方民族博物館 [池上 (2001a: 247-283)所収].
- 池上二良 (1994b)「樺太のウイльта語の感嘆・疑問その他の語尾について」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集: ことばの世界』158-167, 札幌: 北海道方言研究会 [池上(2001a: 94-109)所収].
- 池上二良 (編) (1997)『ウイльта語辞典』札幌: 北海道大学図書刊行会.
- 池上二良 (2001a)『ツングース語研究』24-66. 東京: 汲古書院.
- 池上二良 (2001b)「ウイльта語動詞活用大要」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』7 (「環北太平洋の言語」成果報告書 A2-002), 157-166. 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- 池上二良 (2002)『増訂ウイльта口頭文芸原文集』(ツングース言語文化論集 16) 文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013, 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- Janhunen, J. (2023) Proto-Tungusic. In: A. Vovin, J. A. Alonso de la Fuente, & J. Janhunen (eds.) *The Tungusic languages* (Routledge language family series), 35-75. New York: Routledge.
- 風間伸次郎 (2007)「ツングース諸語の三人称代名詞について」福盛貴弘・遠藤光暁 (編)『語学教育フォーラム』13: 173-184, 東京: 大東文化大学語学教育研究所.
- 潤鴻久治 (編) (1981)『ウイльта語辞典』網走: 網走市北方民俗文化保存協会.
- Mamcheva, N. A. & E. A. Bibikova (2013) *Tajozhnye pesni - pure jājani: Sbornik pesenno-povestvovatel'nogo fol'klora Ujl'ta*. Juzhno-Saxalinsk: GBUK "Saxalinskij oblastnoj tsentr narodnogo tvorchestvo".
- 森貝聡恵 (2016)「ウイльта語北方言テキスト:『冬、父が私を連れ戻した』」『北方人文研究』9: 143-163.
- Ozolinja, L. V. (2013) *Grammatika orokskogo jazyka*. Novosibirsk: Akademicheskoe izdatel'stvo "GEO".
- Petrova, T. I. (1967) *Jazyk orokov (Ul'ta)*. Leningrad: "Nauka".
- Tsumagari, T. (2009) Grammatical Outline of Uilta (Revised). *Journal of the Graduate School of Letters*. 4: 1-21. Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- Tsumagari, T. & Y. Yamada (2023) Uilta. In: A. Vovin, J. A. Alonso de la Fuente, & J. Janhunen (eds.) *The Tungusic languages* (Routledge language family series), 436-462. New York: Routledge.
- 山田祥子 (2010)「ウイльта語北方言にみられる動詞語尾-*li* について」呉人恵 (編)『環北太平洋の言語』15: 85-100, 富山: 富山大学人文学部.
- 山田祥子 (2011)「ウイльта語北方言テキスト: ありがとう、池上先生」『北方人文研究』5: 159-172.
- 山田祥子 (2013)「ウイльта語北方言の文法と言語接触に関する研究」博士学位申請論文, 北海道大学大学院文学研究科.
- 山田祥子 (2014)「ウイльта語北方言テキスト: アザラシ肉に関する体験談」『北海道民族学』

10: 104-113.

山田祥子 (2015) 「〈調査報告〉ウイльта語調査報告：北部方言の文例(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』24: 39-58, 網走：北海道立北方民族博物館.

山田祥子 (2016) 「〈調査報告〉ウイльта語調査報告：北部方言の文例(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』25: 45-66, 網走：北海道立北方民族博物館.

山田祥子 (2017a) 「ウイльта語北方言の音韻的・形態的特長：南方言との相違点を中心に」『北方人文研究』10: 51-70.

山田祥子 (2017b) 「〈調査報告〉ウイльта語調査報告：北部方言の文例(3)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』26: 109-128, 網走：北海道立北方民族博物館.

山田祥子 (2023) 「ウイльта語北方言の未来時制に関する諸問題：動詞語尾-*li* の成り立ちを中心に」日本北方言語学会第6回大会口頭発表資料, 新潟大学+Zoom, 2023年11月19日.

Verbal Suffix *-lu-* in the Northern Dialect of Uilta

Yoshiko YAMADA
(Muroran Institute of Technology)

Keywords: Uilta, Tungusic Languages, verb, suffix

This paper focuses on the verbal suffix *-lu-* in the northern dialect of Uilta (formerly called Orok), one of the Tungusic Languages. The observation is primarily based on materials collected on Sakhalin Island from the 1990s onward.

As a result, the form *-luxA(n)*-PERS, in which the suffix is followed by the perfective participle ending *-xA(n)* and a personal ending, is analyzed as ‘began to’ and the basic function of *-lu-* can be determined as inchoative aspect, as the previous studies have suggested. However, it was found that it cannot help explain a certain kind of construction where the copula verb *bi-* follows a perfective participle with the suffix *-lu-*, as in *-luxA(n)*(-PERS)#*bi-*. The *-luxA(n)*(-PERS)#*bi-* construction is often associated with the Russian expression including *dolzhen* (*dolzhna*, *dolzhno*, or *dolzhny*) by the native speakers today.

Thus far, the author has not found any reliable examples of *-lu-* followed by the imperfective participle ending, i.e., *-llee*, which Petrova (1967) reported about, and *-lli* (<*-lu+ri*). As for the future participle form *-luli* (<*-lu-li*), the author observed three instances from a speaker.

In this paper, the priority is given to the presentation of examples and the observation of the forms, and we do not go into a discussion of the semantics. The author concludes that much remains to be done to reveal the feature of the suffix.

(やまだ・よしこ yamada@muroran-it.ac.jp)